

夏休みの読書計画をたて、実行している生徒もいることでしょう。

自由に使える時間が比較的多くありますので、今まで読みたいと思っていた本や新たなジャンルの本に挑戦するのもいいでしょう。

校長先生も夏に最低1冊は読むことにしています。

一昨年の夏は「それでも日本人は「戦争」を選んだ」を読みました。社会学者と中高生が、なぜ戦争という手段を選んだのかについて対話を通じて学ぶものです。（この本は、昨年受験が終わった中学生が読みたいと言っていたので、人事異動もありプレゼントしてきました）

昨年の夏は「文系と理系はなぜ分かれたのか」を読みました。世の中が複雑になり、文系・理系という分類で学ぶことでは課題解決が困難になってきました。文系・理系という分類ができた歴史的な背景が書かれています。（2階の渡り廊下においてありますので興味ある方は読んでみてください）

そして、今年の夏は「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」という本を読んでいます。作者は、ロンドンの貧乏な人たちが住んでいる地区の保育園で保育士として働いていた方です。

人種、社会的・経済的な階層、宗教、家族関係など多様性の中にある「元」底辺中学校で学ぶことを選んだ息子と母（作者）のリアルストーリーです。学校とは、中学生の学びとは、学力とは、多様性の中で生きることとは、など興味あることが書かれています。読み終えたら、私の教育観、学校観に変化が起るような気がします。

さて、読書について加えます。この「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」の作者ブレディみかさんが先日ラジオに出演していました。その番組の中で、イギリスの子供の読書について話していました。興味深い内容だったので概要を書くと、

- ・イギリスでは、本を読むことが勉強と考えられている
- ・中学生は、1日20分間、紙の本を読む
- ・国は、学校に入学する4歳児の親に読書記録を書かせている（成長すれば子供がする）
- ・この読書習慣がイギリスのシチズンシップエデュケーション（市民教育）につながっている

ジョンソン首相が新型コロナウイルス感染症の規制下にパーティーを開いていたことは、市民教育を受けてきた英国国民にとって許しがたい事件であった

とのことです。

日本の中学生は、公民で社会のしくみを学びます。一方で、イギリスの中学生は、市民教育で社会へ参画する態度やコミュニケーションの仕方まで学びます。そのためには、多くの知識が必要で、読書は欠かせない活動なのです。

コミュニケーションを学ぶ私たちも本を読み、社会が求める人間力を身につけましょう。



2階渡り廊下においてある本